2Aa－4　『日葡辞書』に採録された食に関する語彙について
第２報　植物に関する語彙について

松本仲子（女子栄養大）

目的　東北大学狩野文庫に架蔵される『南蛮料理書』を理解するためには、多面的な検討が必要であると考え、これまではルイス・フロイス『日本史』、アレシャンドウロ・ヴァリニャノ『日本巡察記』などを資料として、成立の推定を行ってきた。次いで調理方法の記述を検討するにあたっては、まず語彙の整理が必要であるところから、今回は『日葡辞書』をとりあげて、収録される食に関する語彙を採集して検討することとした。

方法　資料の『日葡辞書』は、イエズス会宣教師が日本において聴罪、説教を行うにあたって必要とされる日本語習得のために長崎のコレジオにおいて編纂され、1603年に刊行された辞書である。中世から近世にかけての日常の話し言葉を中心に、広汎な分野に亘る語が採録されている点、当時の辞書類が漢字を中心とした字書、歌の用語を収めた辞書の他には存在しなかった中にあって、生活用語を研究するうえで極めて有用な資料である。岩波書店発行の和訳『日葡辞書』を底本として、それに収録される食に関すると考えられる語彙を全て採取し、分類した。

結果　採取した食に関する語彙は約2830語で、『日葡辞書』に収録される総語彙数 32293語の約9%を占めた。それらを食品、料理、調理器具、供食に関する語等に分類し、ここでは植物に関する語についてまとめた。食用にしたか否かが判然としないため、一応採取された全ての植物について樹木類、竹類、草類、、水草類、豆類、芋類、茸類、海草類などに分類した。また食用にしたことが明らかに記されているものについてみると、芋ではサツマイモ、ジャガイモは見られず、野菜ではスミレ、タンポポなどの名称がみられた。